

アバール語の形容詞的分詞と一致*

山田久就

1. はじめに

アバール語は北東コーカサス諸語（あるいはダゲスタン諸語）に属し、主にロシア連邦ダゲスタン共和国とアゼルバイジャン共和国で話されている。

アバール語は絶対格・能格型の格配列を持っていて、自動詞の主語と他動詞の目的語が絶対格で現れ、他動詞の主語が能格で現れる¹。本稿では、自動詞の主語をS、他動詞の主語をA、他動詞の目的語をOと呼ぶことにする²。(1)、(2)は自動詞の例で、(3)、(4)は他動詞の例である³。

(1) Musa g'aniwe w-ach^ana.
Musa・ABS ここに I-来る・PST
「Musa がここに来た。」

(2) Musa k'izhana.
Musa・ABS 眠る・PST
「Musa が眠った。」

*本研究において Isalmagomedov, Isalmagomed M.氏、Samedov, Dzhilil S.氏を中心に多くの方にアバール語のインフォーマントになっていただいた。ここで、感謝の意を申し上げたい。アバール語の文語で用いられている文字はキリル文字であるが、本稿ではラテン文字へ次のような転写を行って、アバール語を表記している。a=a, б=b, в=w, г=g, гъ=g", гь=g', гI=g^, д=d, е=e, ж=zh, з=z, и=i, й=j, к=k, къ=k", кь=k', кI=k^, л=l, лъ=l", м=m, н=n, о=o, п=p, р=r, с=s, т=t, тI=t^, у=u, ф=f, х=x, хъ=x", хь=x', xI=x^, ц=ts, цI=ts^, ч=ch, чI=ch^, ш=sh, шI=shsh, э=e, ю=ju, я=ja。本稿で用いる省略記号は次の通りである。ABL:奪格, ABS:絶対格, AdjPt:形容詞的分詞, ALL:向格, DAT:与格, CM:クラス標識 (一致標識), ERG:能格, FUT:未来時制, GEN:属格, INT:疑問辞, LOC:位格, NEG:否定辞, PL:複数形, PRS:現在時制, PST:過去時制, SUB:假定法, I:第一名詞クラス, II:第二名詞クラス, III:第三名詞クラス, IV:第四名詞クラス。アバール語の位格、向格、奪格はそれぞれ5系列があり、位格、向格、奪格の後に書かれている(1)、(2)、(3)、(4)、(5)はそれぞれ第一系列、第二系列、第三系列、第四系列、第五系列を示す。

¹ 「主語」、「目的語」という用語は伝統的な意味で用いている。

² S, A, OはDixon(1979, 1994)の用語である。

³ 本稿で出てくる固有名詞で、Musa, G^aliは男性でPat^imatは女性である。

- (3) Pat[^]imatitsa g'aniwe Musa w-achana.
 Patimat・ERG ここに Musa・ABS I-連れてくる・PST
 「Patimat が Musa をここに連れてきた。」
- (4) Pat[^]imatitsa Musa chwana.
 Patimat・ERG Musa・ABS 殺す・PST
 「Patimat が Musa を殺した。」

アバール語の動詞には絶対格名詞句の名詞クラスを標示する一致接頭辞を持っている動詞と持っていない動詞がある。名詞クラスには、男性の人間を表す第一クラス、女性の人間を表す第二クラス、人間以外を表す第三クラス、複数の人間あるいは人間以外を表す第四クラスがある。一致接頭辞は、第一クラスが w-、第二クラスが j-、第三クラスが b-、第四クラスが r-である。(1)の自動詞 w-ach[^]ana は S の位置にある名詞句 Musa の名詞クラスである第一クラスを標示する一致接頭辞を持っている。また、(3)の他動詞 j-achana は O の位置にある名詞句 Pat[^]imat の名詞クラスである第二クラスを標示する一致接頭辞を持っている。(2)で用いられている自動詞 k'izhana や(4)で用いられている他動詞 chwana は一致接頭辞を持っていない。筆者が知る限りでは、アバール語に 1,400 ぐらいの動詞があるが、そのうちの約 200 の動詞が CM-ach[^]ine 「来る」や CM-achine 「連れてくる」のように一致接頭辞を持っている。アバール語では語幹に付く屈折接辞は全て接尾辞である。そのため、語頭にある一致接頭辞は本稿で問題にする形容詞的分詞形を含む全ての屈折変化形で保たれる。

アバール語の動詞の形容詞的分詞形には、定形と同様に、過去時制形、現在時制形、未来時制形があるが、形容詞的分詞形のどの時制形も一致接尾辞を持っている。一致接尾辞は、第一クラスが -w、第二クラスが -j、第三クラスが -b、第四クラスが -l である。例えば、自動詞 CM-ach[^]ine 「来る」の形容詞的分詞形は、過去形が CM-ach[^]ara-CM、現在形が CM-ach[^]une-CM、未来形が CM-ach[^]ine-CM である。このように CM-ach[^]ine 「来る」の形容詞的分詞形は一致接頭辞と一致接尾辞の両方を持っている。一方、自動詞 k'izhize 「眠る」の形容詞的分詞形は、過去形が k'izhara-CM、現在形が k'izhule-CM、未来形が k'izhile-CM である。このように k'izhize 「眠る」の形容詞的分詞形は一致接頭辞を持っていないが一致接尾辞を持っている。

形容詞的分詞の最も基本的な用法は名詞を修飾する用法であるが、アバール語の形容詞的分詞はこの他にもいくつかの用法を持っている。本稿の目的はい

ろいろな用いられ方をする形容詞的分詞の一致接頭辞と一致接尾辞がどのような振る舞いをするのかを記述することである。この研究の先行研究としては、Uslar(1889)、Bokarev(1949)に第2節、第7節に関わる記述があるが、筆者の知る限りでは、第3節から第6節に関する記述は存在しない⁴。

2. 名詞を修飾する形容詞的分詞

形容詞的分詞の最も基本的な用法は名詞を修飾する節、すなわち関係節の述語としての用法である⁵。英語やロシア語の形容詞的分詞による関係節では主語(すなわちSかA)だけが関係節のギャップになることができるが、アパール語の形容詞的分詞による関係節ではギャップになることができる名詞句に制限がない⁶。(5)ではS、(6)ではA、(7)ではO、(8)では第一位格名詞句が関係節のギャップになっている。

- (5) Dida g'aniwe w-ach^ara-w was l'ala.
私・LOC(1) ここに I-来る・AdjPt,PST-I 少年・ABS 知っている・PRS
「私はここに来た少年を知っている。」
- (6) Dida g'anije Pat^imat j-achara-w
私・LOC(1) ここに Patimat・ABS II-連れてくる・AdjPt,PST-I
was l'ala.
少年・ABS 知っている・PRS
「私はここに Patimat を連れてきた少年を知っている。」
- (7) Dida Pat^imatitsa g'aniwe w-achara-w
私・LOC(1) Patimat・ERG ここに I-連れてくる・AdjPt,PST-I
was l'ala.
少年・ABS 知っている・PRS
「私は Patimat がここに連れてきた少年を知っている。」

⁴ 本稿で扱っている形容詞的分詞の用法は全てではない。形容詞的分詞の用法は Uslar(1889)、Bokarev(1949)、Madieva(1980)、Samedov(1996)などで挙げられているが、本稿で扱っている範囲内である。

⁵ 本稿では「節」という用語を動詞(定形あるいは非定形)とその従属要素の集まりという意味で用いている。

⁶ 本稿では、関係節が修飾している名詞と関係する関係節内の空所をギャップと呼ぶことにする。

- (8) Dida Pat'imat j-ozhule-w
 私・LOC(1) Patimat・ABS II-信じる・AdjPt,PST-I
 was l'ala.
 少年・ABS 知っている・PRS
 「私は Patimat が信じている少年を知っている。」

形容詞的分詞の一致接頭辞は常に関係節の絶対格名詞句の名詞クラスを標示する。(5)、(7)のように絶対格名詞句が関係節のギャップになっている場合には、ギャップは関係節が修飾している名詞句に依存しているので、形容詞的分詞の一致接頭辞は関係節が修飾している名詞句の名詞クラスを標示する。

一方、形容詞的分詞の一致接尾辞は、関係節がごく少数の特定の名詞(例えば kuts (様子)、mex (時))を修飾している場合を除いて、常に関係節が修飾している名詞句の名詞クラスを標示する。(5)-(8)では、関係節に修飾されている名詞句の名詞クラスは第一クラスであるから、形容詞的分詞は第一クラスの一致接尾辞を持っている。しかし、関係節が kuts (様子)、mex (時間)などを修飾している場合には、形容詞的分詞の一致接尾辞は kuts (様子)、mex (時)などの名詞クラス、すなわち第三クラスを標示することもできるし、関係節にある絶対格名詞の名詞クラスを標示することもできる。Uslar (1889)、Bokarev (1949)はこのような名詞として kuts (様子)、mex (時)、k'ag'ida (仕方、態度、可能性)、bak' (場所)を挙げている。(9)は kuts (様子)の例であり、(10)は mex (時)の例である。(9a)では形容詞的分詞の一致接尾辞が kuts (様子)の名詞クラスである第三クラスを標示しているが、(9b)では形容詞的分詞の一致接尾辞が関係節にある絶対格名詞句 Musa の名詞クラスである第一クラスを標示している。そして、(10a)では形容詞的分詞の一致接尾辞が mex (時)の名詞クラスである第三クラスを標示しているが、(10b)では形容詞的分詞の一致接尾辞が関係節にある絶対格名詞句 G'ali の名詞クラスである第一クラスを標示している。

- (9) a. Dida Musa w-oxara-b kuts
 私・LOC(1) Musa・ABS I-喜ぶ・AdjPt,PST-III 様子・ABS
 b-ix'ana.
 III-見る・PST
 「私は Musa が喜んだ様子を見た。」

b. Dida Musa w-oxara-w kuts
私・LOC(1) Musa・ABS I-喜ぶ・AdjPt,PST-I 様子・ABS

b-ix'ana.

III-見る・PST

「私は Musa が喜んだ様子を見た。」

(10) a. G^ali rok"owe w-achara-b mexal" insutsa
Ali・ABS 家に I-来る・AdjPt,PST-III 時・ERG 父・ERG

dun zhidex"ego ax^ana.

私・ABS 自分・ALL(2) 呼ぶ・PST

「Ali が家に来た時、父は私を自分の所に呼んだ。」

b. G^ali rok"owe w-achara-w mexal" insutsa
Ali・ABS 家に I-来る・AdjPt,PST-I 時・ERG 父・ERG

dun zhidex"ego ax^ana.

私・ABS 自分・ALL(2) 呼ぶ・PST

「Ali が家に来た時、父は私を自分の所に呼んだ。」

関係節が kuts (様子) を修飾していて、関係節の絶対格名詞が第三クラス以外である場合、形容詞的分詞の一致接尾辞が kuts (様子) の名詞クラスである第三クラスを標示している文と絶対格名詞の名詞クラスを標示している文の使用頻度は筆者の資料においてどちらが特に多いということはない⁷。それ

⁷ 本研究では実際の使用例を調べるために次に挙げる 18 冊の本のテキストをコンピューターで利用可能な形で電子化して資料として用いている。(1) Dadaev, Jusup (1998) *Ax^ul gox^ - dir rek^el bux^i*. Max^achk^'ala: Jupiter. (2) G^'albats^'ov, G^'azimux^'amad (1994) *Ganch^'al*. Max^achk^'ala: Dagenstanskoe knizhnoe izdatel'stvo. (3) G^'albats^'ov, G^'azimux^'amad (1994) *Awaragzabi*. Max^achk^'ala: Istina. (4) G^'aliev, Musim (1993) *Sardil^' k^'wagi*. Max^achk^'ala: Jupiter. (5) Zhavatxanov, Nabi-Gulla (1993) *Badisa badibe*. Max^achk^'ala: Jupiter. (6) Medzhidova, Ch. M. (1991) *Awar adabijatal^'ul chirax^*. Max^achk^'ala: Dag^'uchpedgiz. (7) Murtazag^'aliev, Pat^'imat (1995) *Kulakasul jas*. Max^achk^'ala: Dagenstanskoe knizhnoe izdatel'stvo. (8) Muxtarov, S., A. X^'amzatov, i Ch. Medzhidova (1991) *Awar literatura : 5 klass*. Max^achk^'ala: Dag^'uchpedgiz. (9) Mux^'amadov, Musa (1991) *Goro-ts^'er balelde tsebe*. Max^achk^'ala: Dagenstanskoe knizhnoe izdatel'stvo. (10) Mux^'amadova, Majsarat (1996) *Og^, bix^'inal, bix^'inal*. Max^achk^'ala: Jupiter. (11) Mux^'amadova, Sabigat (1992) *Rok^'i*. Max^achk^'ala: Jupiter. (12) Radzhabov, Mux^'amad^'ali G^'ambulatovich (1990) *Erkenab zamanalda ts^'alijal^'e t^'ex^' : 4 klass*. Max^achk^'ala: Dag^'uchpedgiz. (13) Rasulov, G^'arip (1996) *G^'adamalgi rag^'adalgi*. Max^achk^'ala: Dagenstanskoe knizhnoe izdatel'stvo. (14) Rasulov, K^'urbang^'ai (1997) *Bats^'adisel*. Max^achk^'ala. (15) Surxaev, Musalav (1990) *Nux bit^'agi*. Max^achk^'ala: Dag^'uchpedgiz. (16) Surxaev, Musalav (1994) *Tusnax^'azda GULA Galda*. Max^achk^'ala: Jupiter. (17) Surxaev, Musalav (出版年不記載) *Awaragasul zalg^'at*.

に対して、関係節が *mex* (時) を修飾していて、関係節の絶対格名詞が第三クラス以外である文の中で形容詞的分詞の一致接尾辞が絶対格名詞の名詞クラスを標示している文の使用頻度は筆者の資料において 1% 未満である。また、関係節が *k'ag'ida* (仕方、態度、可能性)、*bak'* (場所) を修飾していて、関係節の絶対格名詞が第三クラス以外である文の場合も同様で、形容詞的分詞の一致接尾辞が絶対格名詞の名詞クラスを標示している文の使用頻度は共に筆者の資料において 1% 未満である。関係節が *mex* (時) を修飾していて、関係節の絶対格名詞が第三クラス以外であり、形容詞的分詞の一致接尾辞が絶対格名詞の名詞クラスを標示している文は筆者の資料には 15 例 (5 作品、4 作家) あり、関係節が *k'ag'ida* (仕方、態度、可能性) を修飾していて、関係節の絶対格名詞が第三クラス以外であり、形容詞的分詞の一致接尾辞が絶対格名詞の名詞クラスを標示している文は筆者の資料には 3 例 (3 作品、3 作家) あり、関係節が *bak'* (場所) を修飾していて、関係節の絶対格名詞が第三クラス以外であり、形容詞的分詞の一致接尾辞が絶対格名詞の名詞クラスを標示している文は筆者の資料には 4 例 (4 作品、3 作家) ある。

次にこの研究に協力してくれたインフォーマントの判断を問題にする。関係節が *kuts* (様子) を修飾していて、関係節の絶対格名詞が第三クラス以外で、形容詞的分詞の一致接尾辞が絶対格名詞の名詞クラスを標示している文を容認しないインフォーマントはいないが、関係節が *mex* (時)、*k'ag'ida* (仕方、態度、可能性)、*bak'* (場所) を修飾していて、関係節の絶対格名詞が第三クラス以外で、形容詞的分詞の一致接尾辞が絶対格名詞の名詞クラスを標示している文を容認しないインフォーマントは存在する。関係節が *kuts* (様子) を修飾していて、関係節の絶対格名詞が第三クラス以外で、形容詞的分詞の一致接尾辞が絶対格名詞の名詞クラスを標示している文は問題なく標準アバール語として文法的な文であると判断できるが、関係節が *mex* (時)、*k'ag'ida* (仕方、態度、可能性)、*bak'* (場所) を修飾していて、関係節の絶対格名詞が第三クラス以外で、形容詞的分詞の一致接尾辞が絶対格名詞の名詞クラスを標示している文の実例を方言からの影響とみなす可能性もあり、このような文が標準アバール語として文法的な文としてみなしていいのかどうかは私には判断できない。

Max^hachk^hala: Jupiter. (18) Shaxtamanov, G^humar-X^hazhi (1994) *K^haral g^hor*. Max^hachk^hala: Dagenstanskoe knizhnoe izdatel'stvo.

上記の本には小説、物語、歴史に関するものなどが含まれている。

3. 形容詞的分詞 + 接尾辞-l'i の従属節

アバール語には形容詞的分詞に接尾辞-l'i が付いた形の従属節があり、項が現れる位置にある従属節ではこの形の従属節が最も一般的である。この形の従属節は名詞的でいろいろな格で現れる。(11)では絶対格で現れていて、(12)では能格で現れている。

- (11) Dida Musa g'aniwe w-ach^ara-w-l'i
私・LOC(1) Musa・ABS ここに I-来る・AdjPt,PST-I-l'・ABS
l'ala.

知っている・PRS

「私は Musa がここに来たことを知っている。」

- (12) Musa g'aniwe w-ach^ara-w-l'ijal" dun
Musa・ABS ここに I-来る・AdjPt,PST-I-l'・ERG 私・ABS
g'azhaibl"izawuna.

驚かせる・PST

「Musa がここに来たことが私を驚かせた。」

この形の従属節には過去形、現在形、未来形がある。(11)、(12)は過去形であり、(13)は未来形である。

- (13) Dida Pat'imatisa Musa g'aniwe
私・LOC(1) Patimat・ERG Musa・ABS ここに
w-achine-w-l'i l'ala.

I-連れてくる・AdjPt,FUT-I-l'・ABS 知っている・PRS

「私は Patimat が Musa をここに連れてくることを知っている。」

形容詞的分詞は、従属節にある絶対格名詞句 (S か O) の名詞クラスの接尾辞を取ることでもできるし、中立的な接尾辞としての第三クラスの接尾辞を取ることでもできる。(11)、(12)では形容詞的分詞が従属節にある S の名詞クラスの接尾辞を取っているが、(14)、(15)では形容詞的分詞が中立的な接尾辞としての第三クラスの接尾辞を取っている。

- (14) Dida Musa g'aniwe w-ach^ara-b-l'i
 私・LOC(1) Musa・ABS ここに I-来る・AdjPt,PST-III-I"・ABS
 l"ala.
 知っている・PRS
 「私は Musa がここに来たことを知っている。」
- (15) Musa g'aniwe w-ach^ara-b-l"ijal" dun
 Musa・ABS ここに I-来る・AdjPt,PST-III-I"・ERG 私・ABS
 g^azhaibl"izawuna.
 驚かせる・PST
 「Musa がここに来たことが私を驚かせた。」

(13)では形容詞的分詞が従属節にある○の名詞クラスの接尾辞を取っているが、(16)では形容詞的分詞が中立的な接尾辞としての第三クラスの接尾辞を取っている。

- (16) Dida Pat'imatisa Musa g'aniwe
 私・LOC(1) Patimat・ERG Musa・ABS ここに
 w-achine-b-l'i l"ala.
 I-連れてくる・AdjPt,FUT-III-I"・ABS 知っている・PRS
 「私は Patimat が Musa をここに連れてくることを知っている。」

形容詞的分詞が従属節にある絶対格名詞句(Sか○)の名詞クラスの接尾辞を取っている文と中立的な接尾辞としての第三クラスの接尾辞を取っている文の使用頻度は、筆者の資料においては、7対3ぐらいの割合で従属節にある絶対格名詞句(Sか○)の名詞クラスの接尾辞を取っている文の使用頻度が高い。

一方、形容詞的分詞の名詞クラスの接頭辞は常に従属節にある絶対格名詞句(Sか○)の名詞クラスを標示する。(11)、(12)、(14)、(15)では、形容詞的分詞が従属節にあるSの名詞クラスの接頭辞を取っていて、(13)、(16)では、形容詞的分詞が従属節にある○の名詞クラスの接頭辞を取っている。

4. 形容詞的分詞 + 接尾辞-goの従属節

形容詞的分詞の過去形に接尾辞-goが付くと副詞的な従属節になる。意味的には日本語の「～すると」に近い。(17)は自動詞の例であり、(18)は他動詞

の例である。

- (17) a. Musa g'aniwe w-ach[^]ara-w-go, G[^]ali rok"owe
 Musa · ABS ここに I-来る · AdjPt,PST-I-go Ali · ABS 家に
 ana.
 行く · PST

「Musa がここに来ると Ali は家に行った。」

- b. Musa g'aniwe w-ach[^]ara-b-go, G[^]ali rok"owe
 Musa · ABS ここに I-来る · AdjPt,PST-III-go Ali · ABS 家に
 ana.
 行く · PST

「Musa がここに来ると Ali は家に行った。」

- (18) a. Pat[^]imatitsa Musa g'aniwe w-achara-w-go,
 Patimat · ERG Musa · ABS ここに I-連れてくる · AdjPt,PST-I-go
 G[^]ali rok"owe ana.
 Ali · ABS 家に 行く · PST

「Patimat が Musa をここに連れてくると Ali は家に行った。」

- b. Pat[^]imatitsa Musa g'aniwe w-achara-b-go,
 Patimat · ERG Musa · ABS ここに I-連れてくる · AdjPt,PST-III-go
 G[^]ali rok"owe ana.
 Ali · ABS 家に 行く · PST

「Patimat が Musa をここに連れてくると Ali は家に行った。」

この形の従属節では、形容詞的分詞は、従属節にある絶対格名詞句 (S か O) の名詞クラスの接尾辞を取ることできるし、中立的な接尾辞としての第三クラスの名詞辞を取ることできる。(17a)では形容詞的分詞が従属節にある S の名詞クラスの接尾辞を取っているが、(17b)では形容詞的分詞が中立的な接尾辞としての第三クラスの名詞辞を取っている。(18a)では形容詞的分詞が従属節にある O の名詞クラスの接尾辞を取っているが、(18b)では形容詞的分詞が中立的な接尾辞としての第三クラスの名詞辞を取っている。形容詞的分詞が従属節にある絶対格名詞句 (S か O) の名詞クラスの接尾辞を取っている文と中立的な接尾辞としての第三クラスの名詞辞を取っている文の使用頻度は、筆者の資料においては、7 対 3 ぐらいの割合で従属節にある絶対格名詞句 (S か O) の名詞クラスの接尾辞を取っている文の使用頻度が高い。

一方、形容詞的分詞の接頭辞は常に従属節にある絶対格名詞句（S か O）の名詞クラスを標示する。(17a)、(17b)では形容詞的分詞が従属節にある S の名詞クラスの接頭辞を取っていて、(18a)、(18b)では形容詞的分詞が従属節にある O の名詞クラスの接頭辞を取っている。

5. 形容詞的分詞 + 接尾辞-ani の従属節

形容詞的分詞に接尾辞-ani が付くと条件を表す従属節になる。(19)では自動詞が述語として用いられている。一方、(20)では他動詞が述語として用いられている。

(19) a. Musa g'aniwe w-ach[^]ara-w-ani, dun rok"owe
 Musa · ABS ここに I-来る · AdjPt,PST-I-ani 私 · ABS 家に
 inaan.
 行く · SUB,FUT

「Musa がここに来ていたら私は家に行くであろう。」

b. *Musa g'aniwe w-ach[^]ara-b-ani, dun rok"owe
 Musa · ABS ここに I-来る · AdjPt,PST-III-ani 私 · ABS 家に
 inaan.
 行く · SUB,FUT

「Musa がここに来ていたら私は家に行くであろう。」

(20) a. Pat[^]imatitsa Musa g'aniwe w-achara-w-ani,
 Patimat · ERG Musa · ABS ここに I-連れてくる · AdjPt,PST-I-ani
 dun rok"owe inaan.
 私 · ABS 家に 行く · SUB,FUT

「Patimat が Musa をここに連れてきていたら私は家に行くであろう。」

b. *Pat[^]imatitsa Musa g'aniwe w-achara-b-ani,
 Patimat · ERG Musa · ABS ここに I-連れてくる · AdjPt,PST-III-ani
 dun rok"owe inaan.
 私 · ABS 家に 行く · SUB,FUT

「Patimat が Musa をここに連れてきていたら私は家に行くであろう。」

この形の従属節の形容詞的分詞では、一致接頭辞と一致接尾辞の両方が常に従属節にある絶対格名詞句（S か O）の名詞クラスを標示する。(19a)では一

致接頭辞と一致接尾辞が従属節にある S と一致していて、(20a)では一致接頭辞と一致接尾辞が従属節にある O と一致している。一致接尾辞は、3 節、4 節で問題にした従属節の場合とは違って、(19b)、(20b)が容認されない文であることが示しているように、中立的な第三クラスを標示することはできない。

6. 疑問文や否定文の述語としての形容詞的分詞

(21)のような疑問詞を含む疑問文、(22)のように文の特定の要素に焦点が当てられている疑問文、(23)のように文の特定の要素に焦点が当たられている否定文では、述語として動詞の定形でなく、形容詞分詞形が用いられる。

- (21) Shshiw w-ach[^]ara-w?
誰・ABS I-来る・AdjPt,PST-I
「誰が来たの。」
- (22) Musa-jishsh w-ach[^]ara-w?
Musa・ABS-INT I-来る・AdjPt,PST-I
「来たのは Musa なの。」
- (23) Musa guro w-ach[^]ara-w.
Musa・ABS NEG I-来る・AdjPt,PST-I
「来たのは Musa ではない。」

(21)、(22)、(23)では自動詞が述語として用いられている。一方、(24)、(25)、(26)では他動詞が述語として用いられている。

- (24) L[^]itsa Pat[^]imat j-achara-j?
誰・ERG Patimat・ABS II-連れてくる・AdjPt,PST-II
「誰が Patimat を連れてきたの。」
- (25) Musatsa-jishsh Pat[^]imat j-achara-j?
Musa・ERG-INT Patimat・ABS II-連れてくる・AdjPt,PST-II
「Patimat を連れてきたのは Musa なの。」
- (26) Musatsa guro Pat[^]imat j-achara-j.
Musa・ERG NEG Patimat・ABS II-連れてくる・AdjPt,PST-II
「Patimat を連れてきたのは Musa ではない。」

このような形容詞的分詞は、接頭辞と接尾辞の両方で絶対格名詞句である S か O と名詞クラスにおいて一致する。(21)、(22)、(23)では接頭辞と接尾辞が S と一致していて、(24)、(25)、(26)では接頭辞と接尾辞が O と一致している。一致接尾辞は、3 節、4 節で問題にした従属節の場合とは違って、(27)、(28)が容認されない文であることが示しているように、中立的な第三クラスを標示することはできない。

(27) *Shshiw w-ach[^]ara-b?

誰・ABS I-来る・AdjPt,PST-III

「誰が来たの。」

(28) *Musatsa guro Pat[^]imat j-achara-b.

Musa・ERG NEG Patimat・ABS II-連れてくる・AdjPt,PST-III

「Patimat を連れてきたのは Musa ではない。」

7. 形容詞的分詞の形の従属節を取る動詞

存在動詞 CM-y(i)k[^]ine は、動詞の形容詞的分詞形と結びついて、進行相を表す。自動詞では、(29)のように S は絶対格で現れる。他動詞では、(30a)のように A が能格で、O が絶対格で現れる場合と(30b)のように A と O が共に絶対格で現れる場合がある。

(29) G[^]ali g'aniwe w-ach[^]une-w w-ugo.

Ali・ABS ここに I-来る・AdjPt,PRS-I I-いる・PRS

「Ali がここに来ている。」

(30)a. G[^]alitsa g'anije Pat[^]imat j-achune-j

Ali・ERG ここに Patimat・ABS II-連れてくる・AdjPt,PRS-II

j-igo.

II-いる・PRS

「Ali が Patimat をここに連れてきている。」

b. G[^]ali g'anije Pat[^]imat j-achune-w

Ali・ABS ここに Patimat・ABS II-連れてくる・AdjPt,PRS-I

w-ugo.

I-いる・PRS

「Ali が Patimat をここに連れてきている。」

(29)が示すように、自動詞の形容詞的分詞は、S の名詞クラスを示す接頭辞と接尾辞を取り、存在動詞 CM-y (i)k'ine はS の名詞クラスを示す接頭辞を取る。一方、(30a)のように、A が能格、Oが絶対格を取る場合は、他動詞の形容詞的分詞は、Oの名詞クラスを示す接頭辞と接尾辞を取り、CM-y (i)k'ine はOの名詞クラスを示す接頭辞を取る。(30b)のように、A とOが共に絶対格を取る場合は、他動詞の形容詞的分詞は、Oの名詞クラスを示す接頭辞と A の名詞クラスを示す接尾辞を取り、CM-y (i)k'ine は A の名詞クラスを示す接頭辞を取る。

動詞 CM-ix'ize (見る、見える) と rag'ize (聞く、聞こえる) は意味役割「経験者」を担う第一位格名詞と形容詞的分詞現在形の従属節を取る。CM-ix'ize (見る、見える) でも rag'ize (聞く、聞こえる) でも存在動詞 CM-y (i)k'ine と同じ格の現れ方をする。(31)、(32)は、CM-ix'ize (見る、見える) の例であり、(33)、(34)は、rag'ize (聞く、聞こえる) の例である。自動詞では、(31)、(33)のように S は絶対格で現れる。他動詞では、(32a)、(34a)のように A が能格で、Oが絶対格で現れる場合と(32b)、(34b)のように A とOが共に絶対格で現れる場合がある。

(31) Dida G^ali g'aniwe w-ach^une-w w-ix'ana.
私・LOC(1) Ali・ABS ここに I-来る・AdjPt,PRS-I I-見る・PST
「私は Ali がここに来ているのを見た。」

(32) a. Dida G'alitsa g'anije Pat^imat
私・LOC(1) Ali・ERG ここに Patimat・ABS
j-achune-j j-ix'ana.
II-連れてくる・AdjPt,PRS-II II-見る・PST
「私は Ali が Patimat をここに連れてきているのを見た。」

b. Dida G^ali g'anije Pat^imat
私・LOC(1) Ali・ABS ここに Patimat・ABS
j-achune-w w-ix'ana.
I-連れてくる・AdjPt,PRS-I I-見る・PST
「私は Ali が Patimat をここに連れてきているのを見た。」

(33) Duda G^ali w-el"ule-w rag^ana.
私・LOC(1) Ali・ABS 笑う・AdjPt,PRS-I 聞く・PST
「私は Ali が笑っているのを聞いた。」

(34) a. Duda G[^]alitsa g[^]ersal r-itsune-l
 私・LOC(1) Ali・ERG 嘘・PL,ABS 話す・AdjPt,PRS-IV
 rag[^]arana.
 聞く・PST

「私は Ali が嘘を話しているのを聞いた。」

b. Duda G[^]alitsa g[^]ersal r-itsune-l rag[^]arana.
 私・LOC(1) Ali・ABS 嘘・PL,ABS 話す・AdjPt,PRS-IV 聞く・PST
 「私は Ali が嘘を話しているのを聞いた。」

CM-ix[^]ize (見る、見える)における一致接頭辞と一致接尾辞の振る舞いは、存在動詞 CM-y (i)k[^]ine の場合と同じである。(31)が示すように、自動詞の形容詞的分詞は、S の名詞クラスを示す接頭辞と接尾辞を取り、CM-ix[^]ize (見る、見える)は S の名詞クラスを示す接頭辞を取る。(32a)のように、A が能格、O が絶対格を取る場合は、他動詞の形容詞的分詞は、O の名詞クラスを示す接頭辞と接尾辞を取り、CM-ix[^]ize (見る、見える)は O の名詞クラスを示す接頭辞を取る。(32b)のように、A と O が共に絶対格を取る場合は、他動詞の形容詞的分詞は、O の名詞クラスを示す接頭辞と A の名詞クラスを示す接尾辞を取り、CM-ix[^]ize (見る、見える)は A の名詞クラスを示す接頭辞を取る。

rag[^]ize (聞く、聞こえる)自身は存在動詞 CM-y (i)k[^]ine や CM-ix[^]ize (見る、見える)とは違って一致接頭辞を持たない。rag[^]ize (聞く、聞こえる)の従属節における一致接頭辞と一致接尾辞の振る舞いは、存在動詞 CM-y (i)k[^]ine や CM-ix[^]ize (見る、見える)の場合と同じである。(33)が示すように、自動詞の形容詞的分詞は、S の名詞クラスを示す接頭辞と接尾辞を取る。(34a)のように、A が能格、O が絶対格を取る場合は、他動詞の形容詞的分詞は、O の名詞クラスを示す接頭辞と接尾辞を取る。(34b)のように、A と O が共に絶対格を取る場合は、他動詞の形容詞的分詞は、O の名詞クラスを示す接頭辞と A の名詞クラスを示す接尾辞を取る。

(35a)、(35b)は、疑問詞疑問文で主節の動詞 rag[^]ize (聞く、聞こえる)が形容詞分詞形になっている。このような文における形容詞的分詞の一致接尾辞は、(35a)のように A が能格で、O が絶対格で現れている場合には、O の名詞クラスを示す接頭辞を標示するが、(35b)のように A と O が共に絶対格で現れている場合には、A の名詞クラスを標示する。

- (35) a. L^hida G^halitsa g'ersal r-itsune-I
 誰・LOC(1) Ali・ERG 嘘・PL,ABS 話す・AdjPt,PRS-IV
 rag^hara-l?
 聞く・AdjPt,PST-IV
 「誰が Ali が嘘を話しているのを聞いたの。」
- b. L^hida G^hali g'ersal r-itsune-w
 誰・LOC(1) Ali・ABS 嘘・PL,ABS 話す・AdjPt,PRS-I
 rag^hara-w?
 聞く・AdjPt,PST-I
 「誰が Ali が嘘を話しているのを聞いたの。」

8. おわりに

本稿ではいろいろな使われ方をするアバール語の形容詞的分詞が持っている一致接頭辞と一致接尾辞の振る舞いを記述した。まとめると次のようになる。

まず、形容詞的分詞の一致接頭辞は第2節から第7節で問題にしたどの用法においても常に関係節の絶対格名詞句の名詞クラスを標示する。

次に一致接尾辞についてまとめる。第2節では形容詞的分詞の最も基本的な用法である名詞を修飾する節、すなわち関係節の述語としての用法を問題にした。この用法では、形容詞的分詞の一致接尾辞は、関係節が kuts (様子)、mex (時) などのごく少数の名詞以外の名詞を修飾している場合には常に関係節が修飾している名詞句の名詞クラスを標示するが、関係節が kuts (様子)、mex (時間) などを修飾している場合には kuts (様子)、mex (時) などの名詞クラス、すなわち第三クラスを標示することもできるし、関係節にある絶対格名詞 (S か O) の名詞クラスを標示することもできることを示した。第3節では形容詞的分詞に接尾辞-lⁱ が付いた形の従属節を問題にした。この用法では、形容詞的分詞は、従属節にある絶対格名詞句 (S か O) の名詞クラスの接尾辞を取ることでもできるし、中立的な接尾辞としての第三クラスの接尾辞を取ることでもできることを示した。第4節では形容詞的分詞の過去形に接尾辞-go が付いた形の副詞的な従属節を問題にした。この用法でも、形容詞的分詞は、従属節にある絶対格名詞句 (S か O) の名詞クラスの接尾辞を取ることでもできるし、中立的な接尾辞としての第三クラスの接尾辞を取ることでもできることを示した。第5節では形容詞的分詞に接尾辞-ani が付いた形の従属節を問題にした。この用法では、形容詞的分詞の一致接尾辞は常に従属節にある絶対格名詞句 (S

か○)の名詞クラスを標示することを示した。第6節では疑問詞を含む疑問文、文の特定の要素に焦点が当てられている疑問文、文の特定の要素に焦点が当てられている否定文の述語としての用法を問題にした。この用法でも、形容詞的分詞の一致接尾辞は常に従属節にある絶対格名詞句(Sか○)の名詞クラスを標示することを示した。第7節では存在動詞CM-y(i)k'ine、CM-ix'ize(見る、見える)、rag'ize(聞く、聞こえる)の従属節としての用法を問題にした。この用法では次のようになることを示した。従属節の動詞が自動詞である場合Sは絶対格で現れ、形容詞的分詞の一致接尾辞は常にSの名詞クラスを標示する。他動詞である場合Aが能格で○が絶対格で現れることとAと○が共に絶対格で現れることがある。Aが能格で○が絶対格で現れる場合には形容詞的分詞の一致接尾辞は常に○の名詞クラスを標示する。Aと○が共に絶対格で現れる場合には形容詞的分詞の一致接尾辞は常にAの名詞クラスを標示する。

引用文献

- Bokarev, A. A. (1949) *Sintaksis Avarskogo Jazyka*. Moskva-Leningrad: Izdatel'stvo AN SSSR.
- Dixon, R. M. W. (1979) "Ergativity," *Language*, 55: 59-138.
- Dixon, R. M. W. (1994) *Ergativity*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Madieva, G. I. (1980) *Morfologija Avarskogo Literaturnogo Jazyka*. Maxachkala: Daguchpedgiz.
- Samedov, D. S. (1996) *Slozhnoe Predlozhenie v Avarskom Jazyke v Sopostavlenii s Russkim*. Doktorskaja Dissertatsija. Maxachkala.
- Uslar, P. K. (1889) *Etnografija Kavkaza. Jazykoznanie*. III. Avarskij Jazyk. Tiflis.